

最新

名曲解説全集

補
I

交響曲

管弦楽曲

協奏曲

Chamber

クラシック名曲ガイド④

室内楽曲

最新名曲解説全集
補巻第1巻
交響曲 管弦楽曲 協奏曲

●

著作権所有
複製・翻訳・転載を禁ず

●

昭和57年2月1日第1刷発行

●

編者
音楽之友社

発行者
浅香淳

発行所

株式会社 音楽之友社
東京都新宿区神楽坂6-30 郵便番号162
電話(03)268-6151(代) 営業部(03)202-4291(代)
振替：東京 7-196250

●

© 1982, Ongaku no tomo sha corp., Tokyo Japan

●

定価 2,500円

0777 ISBN4-276-01031-4 C1373 ¥2500E

錦明印刷株式会社／合資会社黒田製本所

序 文

旧版の全十八巻の「名曲解説全集」の第一巻「交響曲(上)」がはじめて世にでたのは昭和三十四年六月である。その当時には、この全集は画期的な企画として注目され、内容的にも良心的であるとして評判を呼んだ。しかしそれから二十年も経ると、音楽の研究はすすみ、新しい資料も発見され、また楽譜やレコードの発売も多種多様になり、演奏会でとりあげられる曲目もきわめて広範にわたるようになった。

そうしたこととで、「名曲解説全集」の改訂を要望する声も大きくなり、新たに改訂のための編集委員会を組織して、その検討をはじめたのである。その結果、収録する曲目も従来のものより四〇五割増加という多数におよび、巻数も全二十四巻ということになった。もちろん、その解説には、それぞれの方面の権威の執筆者各位にお願いし、新しい研究成果を盛りこんでもらうようにした。

いうまでもなく、この新版の全集では、聴く機会の多い曲はすべて網羅するようにつとめたが、それでもなお収録しきれない作品が出てきた。そこで補巻として三巻を追加したが、まだ今後収めなければならぬ作品もでてくることだろう。しかし、そのような特殊な作品をのぞけば、補巻三巻を加えた本全集は、音楽愛好者および音楽研究者にとって必要欠くべからざるものになるに違いない。その意味で譜例も多くのせるようにしたし、解説もできるだけ平易な用語でしかも内容的にはできるだけ精密で高度なものとした。これだけの充実した解説全集は、欧米諸国にも例をみないといっても過言ではない。しかし、多くの読者の方々が利用されるにつれて、いろいろと疑問点や不備な点が目につくようになるかもしれない。編集者はその点には十分に留意した積りだが、読者の方からの御意見は謙虚な気持で受けとめたいと思う。

監修者

海老沢 敏

柴田 南雄

服部 幸三

濱田 徳昭

藤田 由之

皆川 達夫

三善 清達

門馬 直美

(五十音順)

補巻1執筆者

石多 正男

磯山 雅

伊藤 恵子

大久保 一

大宮 真琴

奥田 恵二

小倉 重夫

久納 慶一

佐川 吉男

佐々木 勉

佐藤 章

佐野 光司

菅野 浩和

関根 日出男

高橋 英郎

塚田 れい子

野村 光一

野呂 香

橋本 正昭

浜田 滋郎

平野 昭

藤田 由之

布施 芳一

船山 隆

別宮 貞雄

美山 良夫

貉塚 大二郎

(五十音順)

凡例

- 一、本巻には交響曲、管弦楽曲、協奏曲およびそれに準ずべき作品を収めた。
- 二、配列は作曲家の生年順により、同年生れの場合は没年順に従った。
- 一、楽曲の配列は、原則として作曲年代順にした。
- 二、作曲家名、作品名、楽語等は「標準音楽辞典」(音楽之友社)、「新音楽辞典・楽語」(音楽之友社)、「洋楽索引」(小川昂編、民音音楽資料館)に準拠した。
- 一、選曲については、わが国でしばしば演奏されるもの、もしくはレコードの出ているものを基準とした。
- 一、解説の執筆者名は、曲の最後に、() をもって示した。

楽器名略語表

Str. ————— 弦 楽 器

Vn.	ヴァイオリン
Vn. I	第1ヴァイオリン
Vn. II	第2ヴァイオリン
Va.	ヴィオラ
Vc.	チェロ
Cb.	コントラバス
Hrp.	ハープ

W.W. ————— 木管楽器

Picc.	ピッコロ
Fl.	フルート
Ob.	オーボエ
E.H.	イングリッシュ・ホルン
Cl.	クラリネット
B.Cl.	バス・クラリネット
Fg.	ファゴット (バスーン)
Cfg.	コントラファゴット
Sax.	サクソフォーン

B.W. ————— 金管楽器

Cn.	コルネット
Trp.	トランペット
Tbn.	トロンボーン
Hr.	ホルン
Tuba	チューバ

Perc. ————— 打 楽 器

Timp.	ティンパニ
G.C.	大太鼓
T.Mil.	小太鼓
Tamb.	タンブリン
Cymb.	シンバル
Tam.	タム・タム
Trg.	トライアングル
Bell	ベル (鐘)
Mar.	マリンバ

その他

Pf.	ピアノ
Harm.	ハーモニウム
Org.	オルガン
Cel.	チェレスタ

目次

序文	一
補巻2執筆者(五十音順)	二
凡例	三
楽器名略語表	四

前古典派の交響曲

総説	三
〔イタリヤ〕	四
サンマルティニ作	
交響曲 ト長調 J・C三九	一五
ボッケリーニ作	
交響曲 ニ短調 作品一二の四(G五〇六)	一七
〔地獄〕	一七
〔ウィーン〕	一九
ヴァーゲンザイル作 交響曲 ニ長調	二〇
〔マンハイム〕	二二
J・シュターミツ作 交響曲 ニ長調	
作品一の一「ラ・メロディーア」	
ゲルマーニカ」第一番	三
ホルツバウアー作 交響曲 変ホ長調	三
作品四の三	三
カンナビヒ作 交響曲 変ロ長調	五

〔その他のドイツ〕	二六
W・F・パッハ作 交響曲 ニ短調 F六五	二七
J・A・ベンダ作 交響曲 ヘ長調	二八
〔フランス〕	二九

アルビノーニ

アルビノーニの協奏曲	三
五声の協奏曲集 作品七(四曲)	三
オーボエ協奏曲 変ロ長調 作品七の三	三四
二つのオーボエのための協奏曲 ヘ長調	
作品七の五	三六
オーボエ協奏曲 ヘ長調 作品七の九	三七
オーボエ協奏曲 ヘ長調 作品七の一二	三八
五声の協奏曲集 作品九(二曲)	三九
ヴァイオリン協奏曲 変ロ長調 作品九の一	三九
二つのオーボエのための協奏曲 ヘ長調	
作品九の九	四〇

ヴィヴァルディ

二つのマンドリン、弦楽合奏と通奏低音のための「協奏曲」ト長調 作品二二の一 F.V2	
P二二三	四三

テレマン

管弦楽組曲「昔と今の諸國の人々」…………… 六六

管弦楽組曲 ト長調 「ドン・キホーテ」…………… 六九

三つのオーボエ、三つのヴァイオリンのための

「協奏曲」 変ロ長調…………… 五二

ハイドン

交響曲（四曲）…………… 五三

第二六番 ニ短調 Hob I—二六

「ラメントチオーネ」…………… 五五

第五三番 ニ長調 Hob I—五三「帝國」…………… 五五

第五五番 変ホ長調 Hob I—五五

「校長先生」…………… 六〇

第六三番 ハ長調 Hob I—五三

「ラ・ロクスラーヌ」…………… 六三

オルガン協奏曲（二曲）…………… 六六

ハ長調 Hob XVI—…………… 六六

ハ長調 Hob XVI—ハ…………… 六八

サン＝シヨルジュ

サン＝シヨルジュの協奏交響曲、

ヴァイオリン協奏曲…………… 七二

協奏交響曲 ト長調 作品一二三の二…………… 七三

C・シュターミツ

クラリネット協奏曲 第三番…………… 七六

ドゥヴィエンヌ

フルート協奏曲 第一番 ニ長調…………… 八二

クロンマー

クラリネット協奏曲 第一番 変ホ長調

作品三六…………… 八七

ボイエルドュー

ハープ協奏曲 ハ長調…………… 九三

フンメル

フンメルのピアノ協奏曲…………… 九六

ピアノ協奏曲 ロ短調 作品八九…………… 九六

シュポーア

クラリネット協奏曲 第一番 ハ短調

作品二六…………… 一〇二

ウェーバー

ピアノ協奏曲 第一番 ハ長調

作品一一 J—九八…………… 一〇八

ピアノ協奏曲 第二番 変ホ長調

作品三二 J—一五五…………… 一二

シューベルト

イタリア風序曲（全二曲）…………… 一二四

ニ長調 D 五九〇	二五	交響詩「フン族の戦い」	一五〇
ハ長調 D 五九一	二六	ワーグナー	
ヴァイオリンとオーケストラのための「小協奏曲」		交響曲 ハ長調	一五四
ニ長調 D 三四五	二八		
ベルリオーズ		ビゼー	
ロマンス「夢とカプリス」 作品八	二〇	劇的序曲「祖国」 作品一九	一三
アリアーガ		ドヴォルザーク	
交響曲 ニ短調	二三	序曲「我が家」	一五
		交響詩「真昼の魔女」 作品一〇八	一七
シヨパン		フォーレ	
「ラ・チ・ダレム・ラ・マーノ」による変奏曲		ピアノと管弦楽のための「幻想曲」 作品一一一	一七
(管弦楽付き) 変ロ長調 作品一	二九	組曲「マスクとベルガマスク」 作品一二二	一七
シューマン		リャードフ	
序曲「メシナの花嫁」 作品一〇〇	三三	交響詩「魔の湖」 作品六二	一七
序曲「ヘルマンとドロテア」 ロ短調			
作品一三六	三五	エルガー	
四つのホルンとオーケストラのための		エレジー 作品五八	一七
「コンツェルトシュテュック」 作品八六	三六	アルベニス	
リスト		スペイン狂詩曲	一八
交響詩「英雄の嘆き」 ハ短調	四三	ディーリアス	
交響詩「祭りのどよめき」 ハ長調	四四	パリ	一八
交響詩「ハンガリー」	四七		

ドビュッシー

- 交響組曲「春」……………二六六
 舞踏音楽「カンマ」……………二六九
 ピアノと管弦楽のための「幻想曲」……………二七三
 弦楽オーケストラ伴奏付き半音階ハーブのための
 「神聖な舞曲と世俗的な舞曲」……………二七四

R・シュトラウス

- クーブランのクラヴサン曲による「舞踏組曲」……………二七七
 デュエット・リコンチエルティノ……………二八二

ニールセン

- 交響曲 第二番 ロ短調 作品一六……………二八六
 「四つの気質」……………二八六
 交響曲 第三番 ニ短調 作品二七……………二八九
 「ひろがり」……………二八九
 交響曲 第六番 「シンプル」……………二九二

グラスノフ

- 交響曲 第四番 変ホ長調 作品四八……………二九五
 交響曲 第八番 変ホ長調 作品八三……………二九二

デュカス

- 交響曲 ハ長調……………二九七

シベリウス

組曲「ペレアスとメリザンド」 作品四六……………三〇六

交響詩「夜の騎行と日の出」 作品五五……………三〇九

サティ

バレエ音楽「本日休演」……………三一三

ルーセル

弦楽オーケストラのための「シンフォニエッタ」
 作品五二……………三一九

スクリャビン

交響曲 第二番……………三二五

ヴォーン・ウィリアムズ

交響曲 第七番「南極交響曲」……………三三九
 交響曲 第八番 ニ短調……………三六二
 交響曲 第九番 ホ短調……………三六五
 民謡組曲……………三六八

レーガー

ヴァイオリン協奏曲 イ長調 作品一〇一……………三七二

シュミット

交響曲 第四番 ハ調……………三七九

ファリャ

組曲「賛歌」……………二六三

レスピーギ

ボッティチェリの三枚の絵……………二六七

エネスコ

ルーマニア狂詩曲 第二番 作品一一の二……………二九〇

トゥリーナ

セビーリヤ交響曲……………二九三

マルタン

ハーブシコードとオーケストラのための「協奏曲」……………二九六

マルティヌー

総説……………三〇二

交響曲 第六番 H三四三（交響的幻想曲）……………三〇四

パレエ組曲「シュバリーチェク」 H二一四……………三〇七

リヂツェ追悼 H二九六……………三一二

ピアノ協奏曲 第四番 H三五八「呪文」……………三二四

ヒンデミット

室内音楽（全七曲）……………三七

総説……………三七

十二の独奏楽器のための室内音楽「第一番」……………三九

（終曲、一九二二を伴う） 作品二四の一……………三九

オブリガート・ピアノと十二の独奏楽器の

ための室内音楽「第二番」 作品三六の一……………三二

（ピアノ協奏曲）……………三二

オブリガート・チェロと十の独奏楽器のため

の室内音楽「第三番」 作品三六の二……………三三

（チェロ協奏曲）……………三三

独奏ヴァイオリンと大編成室内管弦楽のため

の室内音楽「第四番」 作品三六の三……………三四

（ヴァイオリン協奏曲）……………三四

独奏ヴァイオリンと大編成室内管弦楽のため

の室内音楽「第五番」 作品三六の四……………三六

（ヴァイオリン協奏曲）……………三六

ヴァイオラ・ダモアレと室内管弦楽のため

の室内音楽「第六番」 作品四六の一……………三八

（ヴァイオラ・ダモアレ協奏曲）……………三八

オルガンと室内管弦楽のための室内音楽

「第七番」 作品四六の二（オルガン協奏

曲）……………三九

プーランク

フランス組曲——クロード・ジェルヴェーズに

よる……………三二

ワイル

交響曲 第一番……………三四

交響曲 第二番……………三九

コーブランド

ピアノ協奏曲……………三四五

ハチャトウリヤン

バレエ組曲「スパルタクス」……………三五〇

ハルトマン

ハルトマンの交響曲……………三五六

交響曲 第六番……………三六九

シヨスタコーヴィチ

バレエ組曲「ボルト」 作品二七のa……………三六三

メシアン

忘れられた捧げもの……………三六七

峡谷から星たちへ……………三七〇

ルトスワフスキ

チェロ協奏曲……………三七九

デュティユ

デュティユの人と作品……………三八五

交響曲 第一番……………三八六

チェロ協奏曲「遙かなる遠い国」……………三九〇

リゲティ

大オーケストラのための「ロンターノ」……………三九三

ブーレーズ

ブリ・スロン・プリ——マラルメの肖像……………三九六

装 幀
本文構成
協力菊 池
道 吉
(株)クリエートハウス
剛 薫

補卷第1卷

交響曲・管弦楽曲・協奏曲

前古典派の交響曲

総説

交響曲というジャンルが生れ、大きな成長をとげたことは、音楽史上の十八世紀——すなわち、自律的な音楽芸術の確立と完成の時代——における最も重要な出来事の一つに数えられる。それはたちまちのうちに器楽の花形ジャンルにのし上がり、作曲家の真骨頂を問われる領域となつて、その後の発展の礎石を築いた。交響曲がなかったとすれば、古典派以降の音楽史の展開は、遙かに寂しいものになつたに違いない。

「交響曲 *Symphonie*」なる概念の原義とその歴史上の用法、ジャンル形成の状況については、本全集第一巻に、門馬直美氏の解説がある。本稿ではこの略述を踏まえながら、前古典派時代における交響曲の諸相を、いくつかの作品を例にとりつつ概観してみたいと思う。曲目は楽譜の手に入るものの中から第一巻を補う趣旨で選んだので、第一巻におけるボイス、C・P・E・バッハ、

J・W・シュターミツ、L・モーツァルト、J・C・バッハおよびハイドンとモーツァルトの初期作品の記述を、合せて参照していただきたい。

ベルゴレージの音楽劇が一世を風靡した一七三〇年代からハイドン、モーツァルトの様式が高度の完成に達する一七八〇年頃までの半世紀をとりあえず前古典派の時代と呼ぶとすれば、この時期にはそれぞれの音楽中心地で独自に、古典派の交響曲様式を確立するための試行錯誤が重ねられていた。この自己形成期の多彩な様相を簡潔に把握することはきわめて困難であるが、最も基本的な流れとして銘記されてよいのは、A・スカルラッティ以来のイタリアのオペラ序曲の形式（急緩急の三楽章構成）から、ハイドン、モーツァルトに代表されるウィーン古典派の交響曲の形式が成長した、ということであろう。そこに後期バロックの種々の音楽実践形態や国民様式、その土地の音楽事情などからの影響を勘案すれば、前古典派の交響曲群のもつ多様性のある程度統一の

な視点から理解することができる。その場合、オペラ序曲の性格をなお強く残したものを「シンフォニア」、すでに古典派的成熟に達したものを「交響曲」と呼び分ける習慣が日本では一般化しているが、本稿では便宜上、タイトルはすべて「交響曲」として記述することにした。

前古典派における交響曲の発展過程で注目されるのは、以下のような点である。

- (1) オペラとの関係が成立の上からも曲想の上からも徐々に解消され、純粋な「演奏会用シンフォニア」が成立する。
- (2) それに伴って表現の射程が拡大され、従来の軽快で生気に富む基調に加えて、真摯なもの、壮大なもの、悲痛なものがとり入れられる。
- (3) メヌエットを第三章とした四楽章形式がしだいに普及する。楽章の数と配列には、その過程において様々なヴァリエーションがみられる。
- (4) 主要楽章（特に第一楽章）がソナタ形式を整えるようになる。それに伴って、動機労作技法が発達し始める。
- (5) 編成がしだいに大きくなり、特に管楽器群の重要性が増す。新しい楽器としてクラリネットが採用され、一方通奏低音は消失に向かう。

こうした過程を終えて交響曲は芸術的な精度と充実を増し、ハイドン、モーツァルトによる偉大な成果へと到達したわけであるが、今日では、発展の途上にある作品群にもようやく光が当てられ、それらがかなり広く鑑賞されるようになった。それらはし

ばしば、前古典派時代の音楽の最良の成果に属している。おおむねギャラント時代の趣味に即して綴られたこうした交響曲は、当時における音楽様式および音楽に対する意識の急速な変化を手にとるようになりかねないばかりでなく、転換期に生きた作曲家たちがそれぞれの土壌で伝統とどう対決し、そこからどんな創意を導き出したかを我々に知らせてくれる。ハイドンやモーツァルトは、一夜にして出現したわけではないのである。次に国別に前古典派の流れを概観し、その代表的な作品を解説してゆく。

イタリア

バロック時代以来音楽上の主導権を握り続けていたイタリアは、交響曲ジャンルの形成においても、ひととき先駆的な役割を果たした。イタリアにおいて演奏会用シンフォニアが従来のオペラ序曲（序曲シンフォニア）から分離するのは一七三〇年頃であるが、イタリアの作曲家たちは以後も序曲シンフォニアに力を入れ続け、この分野で、前古典派の音楽語法の準備とソナタ形式を行った。ヴィンチ (Leonardo Vinci 1690—1730) とレーオ (Leonardo Leo 1694—1744) が、ガルツィ (Baldassare Galuppi 1706—1785) とヨメリ (Niccolò Jommelli 1714—1774) が、チマローザ (Doménico Cimarosa 1749—1801) が、ピッコニ (Giovanni Paisiello 1740—1816) が、ピチニ (Niccolò Piccini 1728—1800) が、サルティ (Giuseppe Sarti 1729—1802) を、こうした序曲シンフォニア・ジャンルの注目すべき作曲家とみなすことができる。

演奏会用シンフォニアの作曲家としては、まず、ジョヴァンニ・